二国間交流事業 共同研究報告書

令和6年4月9日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]

名古屋大学・博物館

[職・氏名]

教授・門脇誠二

[課題番号]

JPJSBP 120228403

1. 事業名 相手国: イスラエル (振興会対応機関: ISF) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) ネゲヴ砂漠と南ヨルダンの後期更新世狩猟採集民による資源利用と石器技術、社会交流(英文) Resource procurement, lithic technology and social networks of late Pleistocene hunter-gatherers: A view from the Levantine marginal zones of the Negev and southern Jordan3. 共同研究実施期間 2022年4月1日 ~ 2024年3月31日 (2年)【延長前】 年 月 日 ~ 年 月 日 (年 ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Ben-Gurion University of the Negev · Professor · Ofer Marder

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額	4,485,000 円
内訳	
1年度目執行経費	2,185,000 円
2年度目執行経費	2,300,000 円
3年度目執行経費	- 円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	7名
相手国側参加者等	9名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	4	1	0 (0)
2年度目	0	1	0 (0)
3年度目			()

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣: 委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入:相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流の概要・成果等

(1)研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

本事業の目的は、イスラエルのネゲヴ砂漠と南ヨルダンにおける後期更新世の遺跡から出土した考古資料を相互に閲覧し、資源利用や石器技術、社会交流の側面の比較を行うことである。イスラエルと周辺諸国のあいだでの研究交流は政治的事情のために限られているが、日本の研究者が関わることで、ヨルダン溪谷の東側と西側のあいだで考古記録の比較研究を促進することを目指した。日本側参加者がイスラエルを訪問し、遺跡や資料の見学および研究者との交流を行った。イスラエル側研究者は、日本側研究者が発掘調査を行う南ヨルダンを訪問し、遺跡や考古資料の見学を行った。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

後期更新世に現生人類(ホモ・サピエンス)がユーラシアに広域拡散した際に、イスラエルのネゲヴ砂漠と南ヨルダンのあいだで類似した石器文化とその変化が生じていたことが、本交流により確かめられた。一方で、石器の素材として用いられる岩石の選ばれ方や、貝殻装飾品の流通パターンには類似性と共に明らかな違いもあることが分かった。これらの成果は、*Nature Communications* とはじめとする学術誌に発表された。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

日本側研究者がイスラエル国を訪問した際に、石器資料を前に議論を行ったことを通して、様々な石器の形態や製作技術の同定や基準を確かめ合うことができた。また、イスラエル研究者が南ヨルダンの遺跡を訪問した際に、遺跡の立地や考古資料の出土状況を確認することができた。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

イスラエル研究者が周辺のアラブ諸国の研究者と直接交流することは政治的事情から極めて稀であるが、今回は日本人があいだに入ることにより、イスラエル研究者がヨルダンの遺跡訪問を行い、ヨルダン人研究者とも交流した。また、本事業の成果について一般講演会を国内各地で行った(東京、名古屋、山梨、仙台、宮崎)。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

イスラエル側参加者の大学院生の博士論文審査に、日本側代表の門脇が加わった。日本側参加者の大学院生 2 名はヨルダンの旧石器時代の石器技術と狩猟活動に関して研究を行い、博士号を取得した。他の 2 名は貝殻装飾品と石器狩猟具について研究し、修士号を取得した。その内 1 名は学会誌に論文発表し、西アジア考古学会の若手奨励賞を受賞した。

(6)将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

本事業で培われた交流の結果、2024年6月にスペインで開催される考古学会において、イスラエル側研究者と同じセッションでの研究発表を計画している。また、若手研究者の交流を継続することにより、共同での遺跡調査や研究に発展する可能性がある。

(7)その他(上記(2)~(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

例:大学間協定の締結、他事業への展開、受賞など

特になし。